

告白の練習

DEKKA マン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「あなたの事が好きです」

演技と隠したその言葉は、偽りのない本当のものだつた。

目

告白の練習

特別な日

次

14 1

告白の練習

「あなたの事が好きです」

溺れてしまいそうな夕日を浴びながら一人の女の子がそう告げる。その女の子の髪はただでさえ黄色いというのに、夕日によつてより色濃くされている。そしてそんな髪色と白い肌には似合わないピンク色に彼女の頬は染められている。

「答えを……貰つてもいいかしら？」

恥じらい、期待、それは何を孕んだ言葉なのだろう、それとも全てだろうか。

「俺は……」

光に包まれる学校の廊下、それは幻想的で、夢だと言われば確かにと納得してしまふようなものだった。その女の子に向かい合うようにして立つてている男の子は長い時間を開け、そしてゆっくりと答えを出した……

「今のは自分でもなかなかだと思つたのだけど……」

「完璧でしたよ、本番それで行つてもいいと思います」

「私は妥協はしないわ、もう一度お願ひできるかしら？」

「も、もう一度ですか……はい」

少しばかり日は落ちてしまつたが問題はないだろう。このやり取りは何回目だろう。今日は3回目だが今までの分を数えると……両の指では足りないだろう。

「……それにしても白鷺さんはなんで俺と練習するんですか？」

「あら、それは前にも答えなかつたかしら？」

「確かにそうですけど……いまいちピンとこなくて」

「この学校の演劇部で一番上手なのがあなただからよ」

「俺よりも部長の方が……」

「部長さんは女でしょ、それとも私に女に告白する練習をしろと言うのかしら？」

もし、ここであなたの事が実は好きだから、なんて言えたらどれ程楽なのだろうか、そんな考えを得意のポーカーフェイスで隠しきる。

「そうですけど……やっぱり白鷺さんの演技は心臓に悪いというか」

「どういうことかしら？」

「白鷺さんはほんとに僕の事好きみたいな演技をするじゃないですか、それは凄いなって思うし尊敬しているんですけど……」

「それならあなたの演技からも似たものを感じるわよ?」

「そ、それは……」

顔を赤くする彼を可愛いと思つてしまい思わず笑みが出てしまう。こんな彼でも演技の時になると信じられないような台詞だつて言えるのだから、そういう台詞の時はどうしてもドキドキが止まらなくなつてしまふ。

「次はもう一つ先までやつてみましょう」

「えーっとこれの次は……これ本当にやらなきや駄目ですか？」

「当然よ、役者魂見せてやるつて最初の方は言つてたじやない」

そうですが、と力なく答える。この次の演技はなんだつたかしら、実はあんまり覚えていない。自分の台詞とその直前の台詞だつたら覚えているけど、相手の演技までは覚えていられない。

キスシーンとかはないはずだからそこまで過激なものにはならないはずだし問題はないだろう。そう思つていた、この時までは。

「……俺もお前の事が好きだ」

そこまではよかつた、だが彼がそう言つた瞬間彼の腕が私の顔の横を通り、世間的に言う壁ドンという姿勢になつた。

正常な思考が働かない、頭が沸騰しそう、台詞だつて飛んでしまつた。今私はどうなつているのだろうか、顔は真つ赤かもしれない、それが彼に見られているかも知れない、そう思うとどうしようもないくらい恥ずかしく思う。

「……白鷺さん？」

「は、はいっ!?」

「……早く台詞言つてください」

「ごめんなさい、飛んでしまつて……」

「白鷺さんにしては珍しいですね」

彼はまだ演技モードに入つたままなのか少しも緊張した様子もなくそんなことを言つてくる、そしてその間も体勢は変わっていない。顔が近い、息がかかつてしまいそうだ、顔の横の手から不思議な熱さを感じてしまう。

「あ、あの……そろそろ」

「…………ごめんなさい！」

そう言うと彼は顔を急に赤くする、ああずるい、このギャップは本当に。あんなにも男らしかつたのに急にこんな可愛く思える、逆も当然そうでこんなにもしおらしいのになんなに男らしくなるのはなんともくるものがある。

「ごめんなさい、俺そろそろ帰らないと……」

「…………いえ、付き合わせているのは私の方なんだから謝る必要はないわよ」

そう言うと彼は頭を下げて廊下を駆ける、できればもう少しいたかつた、だけどそれは彼には悪いだろう。私は素の彼と演じている彼、どちらが好きなのだろう。

「まあ、そんなの決まってるわね……」

別に私は演じている彼は好きじゃない、だんじて腐れ縁の薫が演じたがりだからというわけではない、多分。ただの落差に驚いているだけだ、そしてその落差が普段の彼をより際立てている。私は素の彼が好きだ、好きになつたのは素の彼の方なのだから。

私は芸能人、それも女優という仕事故に学校を休む、または早退するということがとてもというほどではないが多い。彼の事を知つたのは席替えでたまたま隣の席になつた時だつた。

「えつと……昨日休んでましたよね、ノート使いますか？」

私はそこらの人に比べてかわいらしい、美しい、馬鹿ではないからそんなことはわかつていてる。だからこそ男から向けられるなんとも表しがたい気持ちの悪い視線も、女からの嫉妬の目線も慣れているし気づきやすい。

だけどその時の彼は単なる親切心から……だつたのだろうか、もしかしたら近づけるかもという欲望があつたのかもしれないが、少なくとも私は気づかなかつた。

「ありがとうございます」

だからなんだというもでただ感謝の言葉と軽い笑顔をして終わり、その時の私は彼にどのように映つていただろうか、ただ私の笑顔は外れて無かつたと思う。

仮面

多分彼の事を意識し始めたのは多分あの時、Pastel*Pallettesの記念すべき初ライブが失敗して次のライブで成功するまでの間の時だろう。あの時の私は学校にいる時間が比較的に多くなった。

事務所からはパスパレとしてのメディアへの露出は制限されたし、あんなことがあってはテレビへの出演を減らされた。それ自体になんら文句があつたわけでは……いや、今思えば笑い話だがあの時は相当イラついていたかしら。

そんなことがあつたからクラスでは私に対しての陰口が……いや、私に聞こえるように言つていたから悪口だろうか。それは直接ではなく大きな声でもなく、本当にギリギリ聞こえるような、でも確実に届くようななんとも絶妙な大きさでその話をされていた。

そんな時彼はやめろよと大きな声で言うことはなく、私に対しても大きな声で言つても無かつた。実際そんな事を言われても迷惑なだけだし、気弱そうな彼がそんな事を言うとは思えなかつた。でも私は見てしまつた、彼がそのグループの人達に頭を下げてしているところを。

「……白鷺さんへの悪口をやめてあげてください」

「何、ていうかあんた誰？」

「えーと……確かあの女の隣の」

「何それ、もしかしてアイツの事好きなの？」

珍しく教室に忘れ物をしてしまい、放課後取りに戻ろうとしたら偶然その場面を見てしまつた。私は全く理解が出来なかつた。なぜ彼がそんな事をするのか、なぜ私の為に頭を下げる必要があるのかが。

「……だつたらなんですか？」

その言葉を聞くと同時に私は目的すら忘れ学校を後にした、何故なのか、どうしてなのか、痛いくらいに心臓が鳴つて止まらない。私はその時から、彼の事を意識し始めたのは間違いないだろう。

次の日も、その次の日も、またまたその次の日も、私はわざと忘れ物をして教室に戻つた。花音からは、千聖ちゃんつて案外おつちよこちよいなんだね、と言われてしまつた。そして教室に行く度に謝つている彼が理解できなくて、少しだけ嬉しくて……そして自分が嫌に思えた。

「ごめんなさい、今日は練習に行きたくて……」

「全然大丈夫だよ、でも千聖ちゃんが練習に行きたいなんて珍しいね？」

「そうかしら？ 私は練習はちゃんとするタイプよ」

「でも自分から行きたいって言つてきしたことなかつたよね？ それに私とのお茶の時は特に」

「確かにそうね……ごめんなさい、この分はいつか必ず」

「だ、大丈夫だよ」

その日は花音とのお茶の予定があつたのに断つてしまつた、そして私はパスパレの自主練習を優先した。

この時の私には目標があつた、次のライブでは完璧に、悪いところが一つたりとも見つからないくらいにしてみせると。

それは、あのグループを何も言わせなくするため、実力で黙らせるため。そして彼に謝らせるなんて事をやめさせる、その為に。思えばこの時から彼のこと好きだと見ていたのかもしれない。

「……今思えば子供らしいわね」

「あの時の千聖ちゃん凄い剣幕だつたもんね」

「そうだったかしら？」

「そうです、あの時のチサトさんはブシドーって感じで」

「イ、イヴちゃん、それはちょっと違うんじゃない？」

「まああのお陰でみんな纏まつた感はあるけどねー」

なんて事をパスパレのみんなと話しているとスタッフさんが入つてくる、明後日に控えた最終回の撮影の時間を教えて貰つた、それを聞いたみんなは頑張つてね、とかの応

援の言葉をくれた。

「次で最後……ね」

今までずっと練習に付き合つてもらつた彼との関係もこれで終わり、これからはただのクラスメイトに成り下がる。

嫌だ、終わつてほしくない、それなら告白すればいい、彼は多分喜んで、と困惑しながら答えるだろう、でもその勇気はない、出せやしない、それはアイドルとしての、女性としてのプライドからくる自分から行くなんて考えられないというくだらないものだろうか。

「千聖ちゃん、何か悩んでる?」

「……大丈夫よ、大したことではないわ」

「ホントに? 今の千聖ちゃんるんつてしてないけど……」

「チサトさん、迷つてる時は当たつて碎けろ、ですよ」

当たつて碎けろ、当たりたくはないし碎けたくはない、でも何もしないなら当たつた方がいい。こんなプライド、当たつて碎いてしまえばいい。ああ、そう思うと気が楽になつてきた。

「ありがとう、少しだけ楽になつたわ」

笑つてそう言うと本当ですか!? トイヴちゃんは喜ぶ、本当にいいメンバーと私は知

り合えたのだなと改めて私は思った。

迷いはない、先ほど碎けた、告白しよう。例え駄目だつたとしてもそれはそれで女優として生かせるだろう、ただ出来れば女優として生かす事がありませんように、そう願つた。

「あなたの事が好きです」

生憎の曇り空の中でそう告げる。もう撮影は終わつて練習をする必要はない、彼には撮影は明日だと言つてはいるから彼はいつもの練習だと思い込んでいるだろう。

「答えを……貰つてもいいかしら？」

役の台詞を使って少しでも恥ずかしいという感情を紛らわしている。ああ、でもこれじゃあ彼には伝わらないかもしねれない。

「俺も……お前の事が好きだ」

壁に押し付けられる、乱暴で、それでいて優しく。本当に何度やつてもこのシーンは慣れない、高鳴る胸は彼に聞こえてるかもしねない、聞こえてほしいかもしねない。

「だつたら私達、両思いみたいね」

そう言うと彼は少しだけ驚いた顔を見せる。台本ではこんな台詞は無かつた、緊張して、殆ど喋れずに慌てふためきながらもありがとうございますと言うシーン、なのに私

がこんなにも余裕そうに、そんな台詞が出てきたのが不思議なのだろう。

「……そんな台詞ありませんよね？」

「あら、私のアドリブは気に入らなかつた？」

「そうじやないですけど……練習なんですしそういうのは最初から相手に言つておかな
いと」

「これは練習じやないわよ」

そう言うと彼はえつ、と困惑しながら咳き手を退ける。遂にやつてしまつた、言つてしまつた。こうなつたらもう止まるなんてことはない、ブレーキはとつくに壊れてしまつた、当たりう、だけど碎けてはしまわないように。

「本番よ、これは」

「え、でも本番は明日つて……」

「それは嘘よ、撮影はもう終わつてるわ」

だからこれは本当のこと、これが本番、一発勝負。

「白鷺千聖は、あなたの事が好きです」

雲が裂けて光が偶々私に当たる、眩しくもあるが暖かい。

「答えを、貰つてもいいかしら？」

静寂が私達を包み込む。痛くて刺さつてしまいそうなそれは気持ちが悪くて、焦らさ

れいるようでモヤモヤする。

「俺は……俺も、白鷺さんの事が好きです」

その言葉は何とも甘美なものだつた、甘つたるくて吐き出してしまってそうなくらい。だけど一つだけ、たつた一つだけ気に入らない事がある。

「呼び方が違うわよ、やり直し」

「ええ……俺結構頑張ったんですけど……」

「だつたらもう一回頑張りなさい、男の子なんだから」

そう言うと彼は顔を赤く染める、なんとも可愛らしくて普段の彼、それは演技ではなく素の彼。雲がどんどん離れていき、光がより広く、大きく私達を照らし出す。

「俺も……千聖の事が好きです」

二回目のそれは先ほどのようなハキハキとしたものではない、だけどそれが彼らしくて、名前で読んでくれたことが嬉しくて、更に胸を高鳴らせる。

「こんな場所だけ……する？」

「い、いや流石に……」

「あら、私の初めてよ？ それとも私の勇気も踏みにじる気？」

唇に手を当てながらそんな事を言う、少しだけ煽つてあげると彼も決心がついたのか私の方に更に近寄つてくる。

「初めてだから……優しくしてね？」

初めてのキスは甘くて、少しだけ酸っぱかった。気づけば雲は何処かに行ってしまった
い、光はより強く私達を照らしていた。それはまるで、私達を祝福しているみたいだつ
た……

特別な日

『明日つて空いてますか?』

『ごめんなさい、明日はパスパレのみんなとのミーティングがあつて』
『そうですか』

私と彼は付き合つている事を隠している。もし付き合つてることがバレてしまつたとしたらマスコミに取り上げられるだろうし、パスパレのみんなにも迷惑がかかつてしまつ。

だから彼とは極力話さない、学校でもこんな風にメッセージでいちいちやり取りをしないといけなかつたり、一緒出かける時は変装をしないといけないのだから不便極まりない。そういうときは普通というのが羨ましくて、妬ましく感じる、割りきつたつもりでも羨ましいものは羨ましいのだ。

『でも急にどうしたの? あなたから誘うなんて』

『なんでもないですよ、気まぐれです』

私と彼が出かける時はいつも私から誘つてはいる。それは彼が気弱な性格だからとうのはあるが、やはり私の仕事と重なる可能性があるから。

彼は彼なりに忙しいと思うのだが、頑張つてスケジュールを開けてくれたりしてゐるのを知つてゐる身からするととても嬉しかつたりもした。

「明日つて何かあつたかしら」

明日は4月6日、バレンタインとかホワイトデー、ハロウインなんかの特別な事はない、普通の日。少しだけ考えてみたがやはり思い付かない、本当に彼の単なる気紛れかもしれない。

誘いを断つた小さな罪悪感が襲つてくる、明日ミーティングが早く終わつたら連絡しよう。そんなことを思いながら私は明日の準備を進めた。

だんだんと気温が暖かくなつてきてむしろ暑いくらいだ、ふわりと吹く風に帽子が飛んでいつてしまいそう。事務所への道は相変わらず人通りが多いが、事務所の前になると途端に人が減る。何故なのだろうと考えた事はあるけど結局わからない、芸能事務所となると恐れ多かつたりするのだろうか。

「失礼します」

「「「千聖ちゃん、誕生日おめでとー！」」」

へつ、と私らしくなく零れた声は複数のクラッカーの爆発音にかき消される。ああ、そういえば今日は私の誕生日だった、最近はいろいろと忙しくてすっかり忘れていた。

「これ、みんなからのお誕生日プレゼントです！」

麻弥ちゃんにそう言われ渡された箱を開ける、びっくりしすぎて今は何がなんだかわかつていよい。

「これは……オルゴール？」

「みんなで一生懸命探したんだ！」

「音色も、とつても素敵なんですよ」

「早く聴いてみたいわ、みんなありがとうね」

嬉しい、こうやつて誰かに祝つてもらつたのはいつぶりだろう、テレビで祝つてもらう事はあるけど所詮は建前、心から祝つてくれたと思えるのはもしかして花音を除けば初めてかもしねない。

「えつと……これを早く片付けないとミーティングが」

「あれは嘘だよ、千聖ちゃんを驚かせようつていうのでスタッフさんにも協力してもらつたんだ！」

「ねえねえ千聖ちゃん、この後シヨツピングにでも行こうよ！」

「駄目ですよ日菜さん、流石に掃除は手伝わないと……」

「えく、めんどくさい！」

ああ、そうか、今日は私の誕生日なのか、熱が冷め冷静な思考が戻つてくる。特別な

日じやないか、何が普通の日だ、少なくとも私にとつては、もしかしなくとも彼にとつても。

「ごめんなさい、実はこの後用事があつて……」

「それは仕方ないです、私残念です……」

「イヴちゃんそんな落ち込まないで……また別の日なら大丈夫だから」

「本当ですか！　でもやっぱり特別な日にいれる方が嬉しいです……」

「本当にごめんなさい」

イヴちゃんの言うことはわかる、やっぱりこんな特別な日は……大切な人といたい。パスパレのみんなも大切だけど、私は彼を取りたい。私は再度謝ると、走りながら部屋を出た。

「あんない急いでる千聖ちゃん初めて見たかも……」

「確かに、いつも余裕を持つて優雅って感じだから珍しいですね」

「もしかしたら彼氏さんじやない？」

「チサトさんつて婚約相手がいたんですか！」

「あたしは学校が違うから知らないよ、学年も一緒だし彩ちゃんそういう噂聞いたことないの？」

「え、私!?　うーん、聞いたことはないかなー」

そんな会話は当然私には届かなかつた。

私は事務所内を走りながら彼に電話をかける、彼が電話に出ないことには場所がわからぬのだから走る必要はないのだがつい走つてしまう。

『どうかしたんですか？』

『ミーティングの方が早く終わつたので、今何処にいるのか聞こうと』

息はきれぎれ、こんな私らしくないなんてのはわかつてゐる、事務所から出てすぐのこんなところにいるはずがないのに左右を探してしまふ。そしてその動作で、そこにいるはずのない人が見つかつてしまつた。

「ど、どうしてここに!?」

『待つてました、じゃ駄目ですか？』

電話越しにそういう彼はゆつくりと歩いて近づいてくる。いつたいいつからいたのだろう、周りには不思議と人がいない、この事務所の前だから。ああ、でもいなくてよかつた、きっと今の私の顔は、物凄くだらしなくなつてしまつてると思うから。

「……いつからいたの？」

「まあ寒いなんて季節も過ぎたのでそこまで辛くなかったですよ」

「そういう時はさつき来た所つて言うのよ」

「即興芸は苦手なんですよ」

彼は軽く笑いながらそんな事を言う、どうしても右手にかけた紙袋が気になるがあえて言わない、多分それは私へのプレゼントだから。

「……今日は何処に行くか決めるの?」

「千聖さんの行きたいところに行つた方がいいと思つて決めてないですね」

「そう……取り敢えずお茶でもしましよう」

何処に行こう、でも今日は特別だから隠れたくない、堂々としていたい、そうなると

……あそこかしら。

「それじゃあ行きましょう」

私と彼は手を繋ぐ、彼は内気だから手を繋ぐまでに長い時間がかかった、それは私と長い時間いられなかつたというのもあるのだろう。

だけど今では人目さえ気にしなければ彼も恥ずかしがりながらだけどやつてくれる、それが彼との距離が縮まつてる証明となつて、どうしても嬉しい気持ちになる。暖かい太陽の光はあの時みたいに、私達を包んでいる。

「えつと……ここのは」

「ここなら別に変装しなくても大丈夫だから」

「でもここ、珈琲店ですよね、千聖さんは紅茶が好きなんじや」

「珈琲店って名前だけど実質喫茶店みたいな所だから大丈夫よ」

『羽沢珈琲店』は私のお気に入りのお店の一つ、美味しいし、つぐみちゃんは可愛いし、イヴちゃんがここでバイトをしているから私がいることがバレたとしてもそこまで問題にもならなかつたりすると思うから、まあバレないにこしたことはないのだけど。

「いらっしゃいませー」

つぐみちゃんに案内されて席につく、彼女はなんだか驚いているが、それは私がいることに驚いているのではなく、後ろにいる彼に驚いている。

「つぐみちゃん、いつものをお願いするわ」

「わかりました、えっと……お付きの方は何にしますか？」

「何がおすすめなんですか？」

「ブレンドコーヒーがおすすめになつてます！」

「じゃあそれでお願ひします」

つぐみちゃんはチラチラと彼の方を見る、やはりそういうのが気になるお年頃なのだろうか、それ自身になんら不快感は覚えないけど、彼がつぐみちゃんの方を見ているのは不快だ。

「……俺何かしましたか？」

「そうね、自分で気づきなさい」

「そんなあ……」

まあ無意識だろうから気付かないだろうけど、ちょっとだけ顔を背けると落ち込む彼が本当に可愛らしくて仕方がなくて、もつと弄りたくなってしまう。

「そういうばその箱何が入ってるんですか？」

「オルゴールよ、パスパレのみんなに貰ったの」

「どんな音出すんですか？」

「私もまだ聴いてないの、後で一緒に聴く？」

答えが返つてくる前につぐみちゃんが注文したもの届けてくる。本当のここ珈琲はいい匂いがする、入れたて特有のものなのかわからないがほろ苦い薫りがする。

「あなたも食べる？」

「……頂きます」

色鮮やかと言うべきか、ロシアケーキというものでそんな名前のわりにはケーキじゃなくてクッキーだ、ジャムやクリーム、チョコレートが載せてあるもので、紅茶に非常に合うから重宝している。

「そういえば今日は渡したいものがあつて……」

「……中を見てもいいかしら？」

どうぞ、と言わされたので紙袋の中を見る、そこには大量……ではないがお菓子が入つていた。

「これって……」

「前好きだつて言つてたのを思い出しまして……」

「でもこれ、高かつたでしよう？」

「普段お金使わないので……」

あははと小さく笑う彼は本当にずるい、もつと、もつと好きになつてしまふじやないか。

「つぐみちゃん、オルゴールかけても大丈夫かしら？」

「今は他のお客さんもいないし大丈夫だと思いますよ」

オルゴールのネジを回すと綺麗な音色が流れてくる。今私の前には彼がいて、パスパレのみんなからもらつたこんなにも綺麗な音がなつていて、美味しいお菓子や紅茶を口にして、気が抜けてしまいそうな珈琲の薰りがして、そして手には彼からの誕生日プレゼントがある。

「ねえ

「なんですか？」

「私、あなたの事が好きよ」

「……俺もですよ」

ああ、本当に今日は、

特別な日だ。